日本映画祭２０２６

２０２６年１０月３０～３１日
於　リロングウェ　国立図書館内ＰＡＢＷＡＬＯ多目的ホール

１０月３０日及び３１日、在マラウイ日本国大使館は、リロングウェの国立図書館サービス内のＰＡＢＷＡＬＯ多目的ホールにて、日本映画祭２０２６を開催しました。会場には、学生や在留邦人、外交団のメンバーをはじめ、日本文化に興味のある人々が来場しました。本映画祭は、来場者が友人や家族と共に日本の様々な側面や文化、人々に触れる貴重な機会となりました。



開会の挨拶において、内藤康司大使は、「上映される映画の中に、日本とマラウイを繋ぐ、いくつかの共通点を見出すことができるかもしれません。それは、お互いへの敬意、地域社会における強い絆、アイデンティティ、そして世代から世代へと受け継がれる物語などです。特に、日本映画における民話の役割は、ここパブワロで毎週土曜日の朝に子どもたちの間で親しまれている、マラウイの豊かな語り部（ストーリーテリング）の伝統を思い起こさせることでしょう」と述べました。

アーモン・カパスレ国立図書館長は、同館の敷地内で様々なイベントを開催し、継続的な支援を行っている大使館に謝意を表するとともに、これらの映画が観客にとって日本への理解を深める一助となることへの期待を語りました。

４作品すべてを鑑賞した来場者の一人は、映画はエンターテインメントとして面白かっただけでなく、日本に対する新たな視野を広げ、世界を広げてくれたと語りました。

２日間にわたる日程の中で、来場者は『線は、僕を描く』、『鍵泥棒のメソッド』、『河童の三平』、『武士道シックスティーン』の４つの日本映画を上映しました。友情や自己成長から、アイデンティティ、ライバル関係まで、多岐にわたるテーマを描いたこれらの作品は、あらゆる観客の心を捉え、来場者を楽しませました。

大使スピーチ全文：https://www.mw.emb-japan.go.jp/files/101111141.pdf



内藤大使によるスピーチ



カパスレ図書館長によるスピーチ



会場入口